

児童における食生活リテラシー尺度の開発

角谷雄哉（農業・食品産業技術総合研究機構 食品研究部門 特別研究員）

1. 背景・目的

現代の子どもは生まれたときから多様なメディアに囲まれた生活を送っており、様々な情報に触れる機会が増えてきている。このような現状から、食情報を鵜呑みにせず、様々な情報源から適切な情報を選び出し、理解し、活用していくスキルを身につけさせるために、子どもたちへのリテラシー教育が進められている。

本研究では、児童を対象として、食に関する情報にアクセスし、理解、利用していくための個人の意欲や能力を決定する認知的・社会的スキルである食生活リテラシーを評価する心理尺度を開発することを目的とした。質的研究（研究Ⅰ）と量的研究（研究Ⅱ）を実施することにより、開発した尺度得点の信頼性と妥当性の検討を行う。

2. 研究方法

【研究Ⅰ】 児童用食生活リテラシー尺度の候補項目を作成するために、文献レビュー・実践レビュー・インタビューを実施した。文献レビューは、オンラインデータベース（PubMed）を用いて、小学校児童のリテラシー評価を行っている文献を抽出し、レビューした。実践レビューは、文部科学省のリテラシー教育方針、国内でリテラシー教育に取り組んでいる事例、および児童のリテラシー調査をレビューした。インタビューは、小学校教諭として勤務経験のある者などを対象に児童のリテラシー教育において重要な点を尋ねた。これらの結果をもとに、児童用食生活リテラシー尺度を作成した。

【研究Ⅱ】 作成した尺度の信頼性と妥当性を確認するために、茨城県 A 町の児童を対象に横断的質問紙調査を実施した。有効回答の得られた 150 名の回答をもとに、信頼性の証拠（探索的因子分析、クロンバックの α 係数）、内的構造に基づく証拠（検証的因子分析）、他変数との関連に基づく証拠（基準関連妥当性）をそれぞれ提示した。

3. 結果・成果

【研究Ⅰ】 文献レビューによって抽出された児童を対象としたリテラシー尺度は、全て基礎的なスキルである機能的リテラシーを評価するものであった。実践レビューの結果、応用的なスキルである相互作用的反リテラシー・批判的反リテラシーの向上に重点を置くことや、実践的な学習や行動に基づく評価が重要であることが示唆された。これらの結果およびインタビューから得られた結果をもとに、児童用食生活リテラシー尺度の候補項目としての機能的リテラシー・相互作用的反リテラシー・批判的反リテラシーの 3 因子を想定した 22 項目の質問項目を作成した。

【研究Ⅱ】 探索的因子分析の結果、3 因子 12 項目の因子構造を採択した。第一因子は「食に関する情報は、内容がむずかしくてわかりにくい」などを含む機能的食生活リテラシー、第二因子は「食に関する情報を、自分から進んで調べることができる」などを含む相互作用的反食生活リテラシー、第三因子は「食に関する情報について、正しいかどうかを判断することができる」などを含む批判的反食生活リテラシーとなった。得られた因子構造で尺度得点を算出し解析した結果、良好な信頼性および妥当性を有することが確認できた。

4. 今後の課題

本尺度得点と実際の食行動との関連の検討が十分ではなかった。児童のリテラシー教育における、食生活リテラシーの重要性を明らかにするには、食生活リテラシーの向上が児童のどのような行動に結びつくかを検討する必要がある。今後は行動変容ステージなどの行動評価と本尺度の併用により、食生活リテラシーと食行動との関連を解明する必要がある。



図 児童用食生活リテラシー尺度の構成